

平左衛門丸令和 3 年 発掘調査概要報告

= 目次 =

- 1 発掘調査の目的・・・・・・・・・・資料 1 ページ
- 2 事前調査のまとめ・・・・・・・・・・資料 2～6 ページ
- 3 令和 3 年調査の概要・・・・・・・・・・資料 7～17 ページ
- 4 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料 18～19 ページ

1 発掘調査の目的

【調査の目的】

宇土櫓および続櫓台石垣を修復するにあたり、その復旧方法の検討とともに、本質的価値も含めた情報収集を目的としたもの



【遺構確認調査】

- 宇土櫓曲輪側石垣の基底部確認、曲輪側遺構面の確認
- 宇土櫓曲輪側埋没石垣の確認
- トレンチ3本を設定

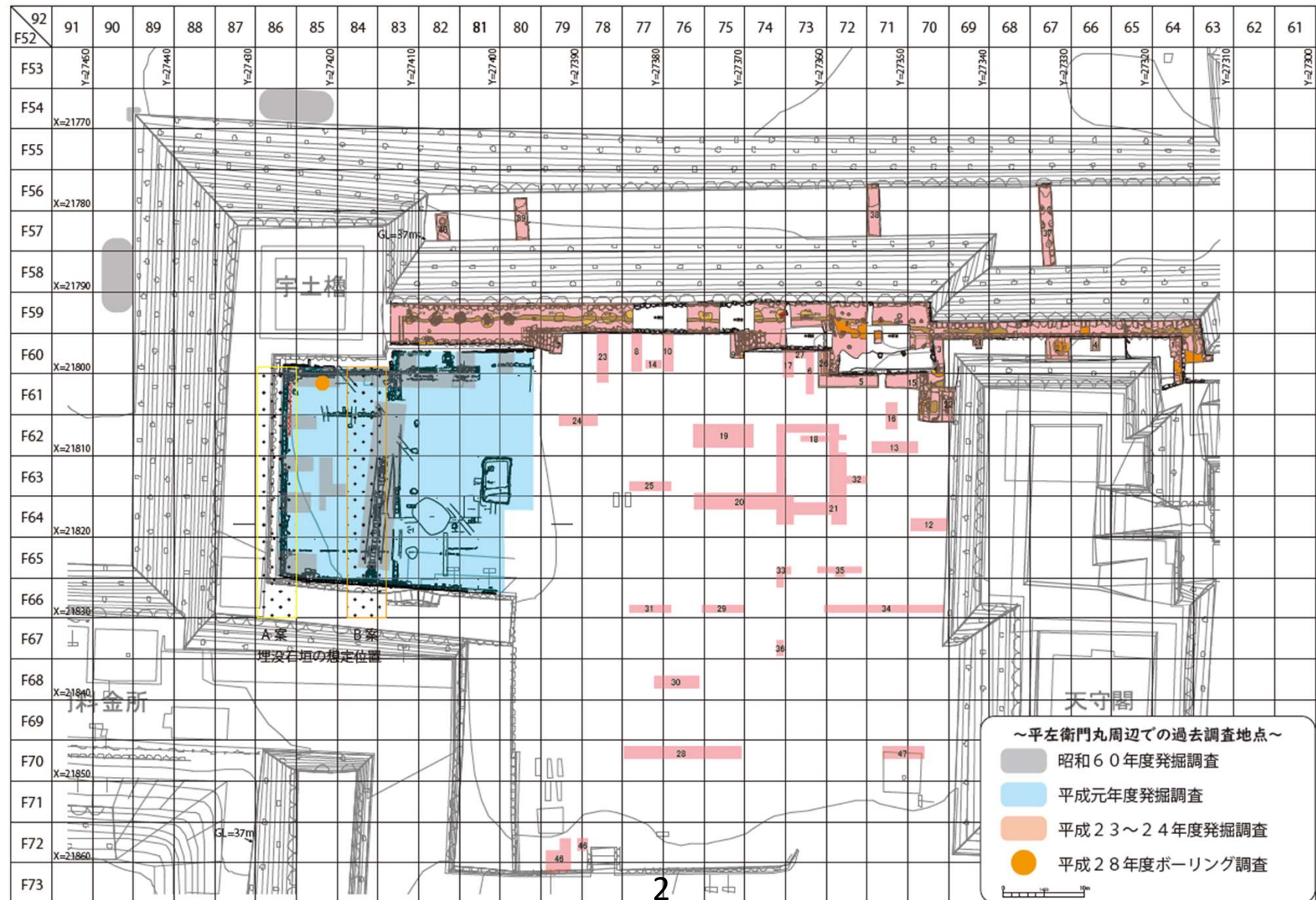
【調査後】

- 遺構面に帰属する遺構に影響がないように慎重に旧状に復する



令和3年3月19日付け2文庁第1913号で許可

2 事前調査のまとめ



2 事前調査のまとめ（昭和60年）

昭和60年度調査

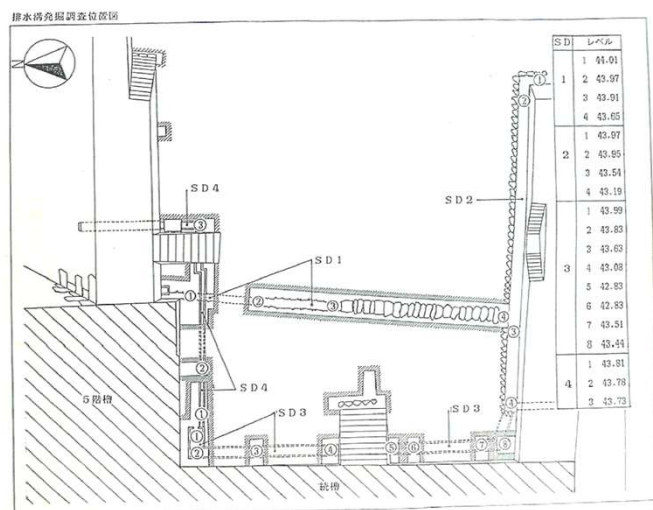
期 間：昭和60年12月（1985）から昭和61年1月（1986）

場 所：平左衛門丸西側（トレンチ調査）

面 積：推定200㎡

原 因：宇土櫓修理工事に伴う平左衛門丸の土砂すき取り工事のための地下遺構
事前確認調査

概 要：宇土櫓保存修理工事に伴い宇土櫓と続櫓東側の空間について事前に確認調査を行ったものである。平成元年度に行われた平左衛門丸の土砂すき取り工事に際して文化庁に提出された現状変更申請に添付されている『重要文化財熊本城宇土櫓東側の地下げ、並びに同続櫓東側塀の復元計画』によると宇土櫓の蟻害原因の一つが地上げされて湿潤な状態となった平左衛門丸の西側にあり、それを改善するため土砂すき取り工事が計画されたようである。



	S D 1	S D 2	S D 3	S D 4
断面図				
概況	- 溝の底部は、全体に敷石の切石を敷いており、側石は底石より敷石を2〜3石積んでおり、そのレベルはSD 1の石積レベルとほぼ一致している。 - 溝の北端（5階棟東側出廊）付近ではSD 4と切合っており、SD 1の底石はSD 4の側石上に載るように入植されている。 - 溝内の埋積土は15〜20cm程度であり、遺物はほとんど検出されていない。	- 溝の底石及び側石は敷石の切石を使用している。溝の北側は側石の直上より敷石を2〜3石積んでおり、そのレベルはSD 1の石積レベルとほぼ一致している。南側の側石は石田とほぼ接するように草造されている。 - 溝は西側にて石田内部の排水口と接続して排水するシステムをとっている。 - 溝内の埋積土は10〜25cm程度であり、土砂等が検出された。	- 溝の底石及び側石は敷石の切石を使用している。 5階棟、続櫓の接合部には併せて敷石を敷いており、側石のレベルはSD 3の石積レベルとほぼ一致している。 - 溝の北側へ延びる溝には石田で底石が敷設され、側石が敷石の切石で敷設されている。 - SD 1は他の3箇条溝とは違い、5階棟東側の排水口へ排水する役割をもっている。 - SD 1はSD 1、SD 3と切合っていることとこの溝の深さが浅くあり、出土物とあわせて最も	- 溝の底石及び側石は敷石の切石を使用している。 - SD 1は他の3箇条溝とは違い、5階棟東側の排水口へ排水する役割をもっている。 - SD 1はSD 1、SD 3と切合っていることとこの溝の深さが浅くあり、出土物とあわせて最も

2 事前調査のまとめ（平成元年）

平成元年度発掘調査

期 間：平成元年（1989）

場 所：平左衛門丸西側

面 積：推定1000m²

原 因：宇土櫓修理工事に伴う平左衛門丸の土砂すき取り工事に伴う調査

概 要：①昭和60年度発掘調査概要で述べたように、宇土櫓の蟻害対策として計画された土砂すき取り工事に伴って行われた発掘調査である。昭和60年調査がトレンチを設定し行われたのに対して、平左衛門丸の西側を全面発掘調査している。報告書によると発掘調査と並行して明治期に設置されたと思われる石段を2つ、発掘調査で見つかった後補溝1ヶ所（どの溝かは不明）を撤去し、その他の遺構については埋め戻しを行い、一部は水路の復旧・新設を行っている。また、埋め戻しの際は遺構上面に10cmの山砂を入れている。



2 事前調査のまとめ（平成元年）

第6章施工 第1節 実施工程及び仕様 七 雑工事

（4）排水工事

概要 宇土櫓東側（城内側）の排水が悪く、地下調査の結果、雨落溝が発見され、この溝を復旧整備した。

雨落溝 加藤時代の溝は埋め戻し、その上に雨落溝を新設した。溝壁、底石とも阿蘇溶結凝灰岩で、側壁、底石の形状は既存の形状に倣った。（側壁150×360mm、底石150×350mm）。溝底は既存の排水勾配に合わせ施工し、100mmの玉砂利を入れた。雨水が集中して落ちる一ヶ所（五階櫓東南谷）には枺を設けた。溝底および溝縁は三和土（消石灰、山砂、粘土）で叩き締めた。

その他 既存水溜から排水溝（続櫓東側）へ排水する。その際、既存排水口の清掃を行った。

（5）表土すき取り工事

概要 地下調査によって、現地表より約70cm下方で雨落溝が発見された。この溝を復旧整備することに伴い地盤を約70cm下げた。

樹木移植、伐採 地盤を下げることに伴い、既存樹木を移植、伐採した。

移植樹木—高木（イチョウ1本）、中木（モミジ1本、ウメ1本）、二の丸へ移植した。

伐採樹木—高木（サクラ2本）、低木（モミジ、ヒラドツツジ、マサキ、タケ各1本）伐採し場外に処分した。

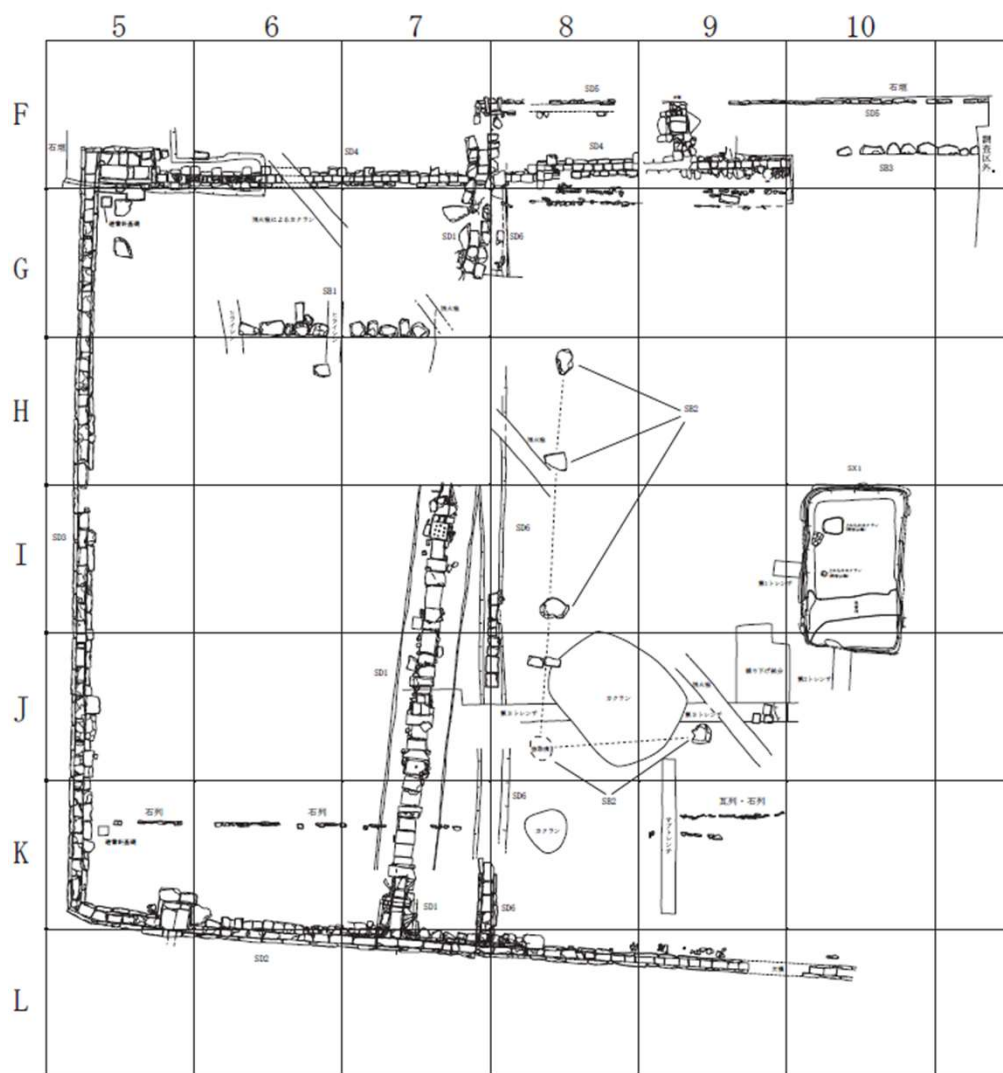
石段、後補石段、後補溝撤去 地盤を下げるに伴い既存石段2ヶ所（続櫓東側の中央、五階櫓東側）、後補溝1ヶ所を撤去し場内の指定場所へ石材を運搬した。

表土のすき取り 表土のすき取りは平均70cm行った。上層の50cmは機械（ユンボ）により掘削した。その際、主要遺物（瓦等）は採集をした。下層の20cmは人力により丁寧にすき取った。特に瓦等の遺物が多く出土したので、清掃整理した。

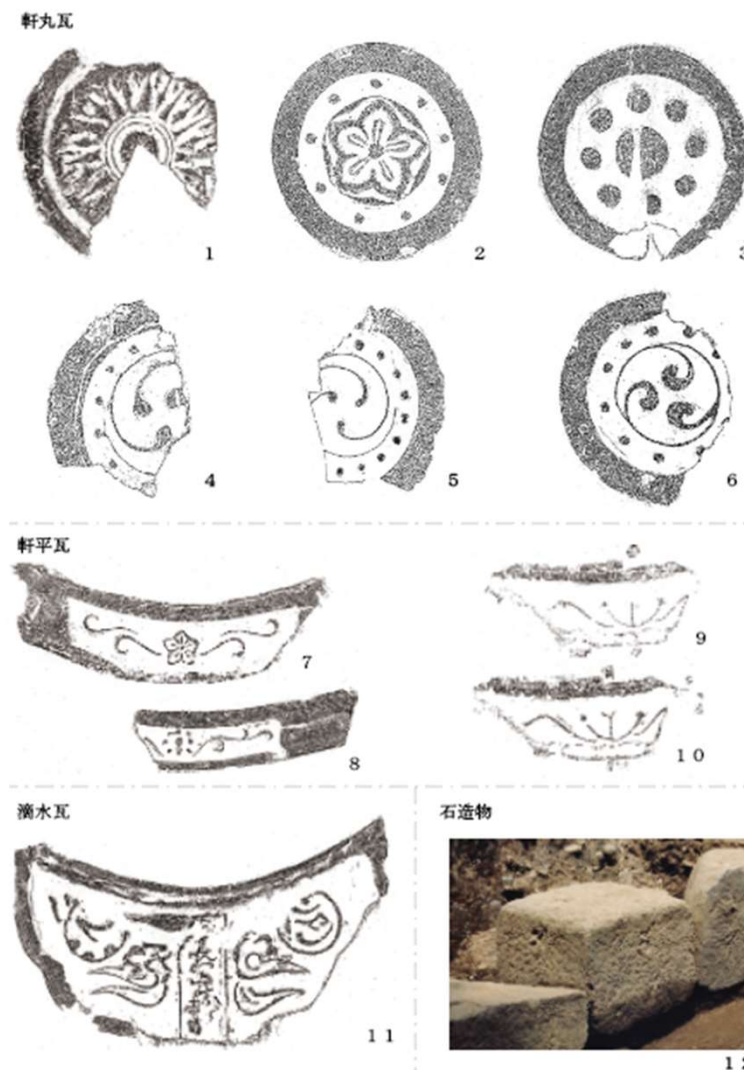
埋め戻し 10cm山砂を敷きならし埋め戻しを行った。

設備移設 地下げ工事に伴い、既設消火栓及びその配管、自火報のケーブルを移設した。消火栓への配管は、自ガス管GP100Aを使用し、防錆処理を行った後、埋設した。自火報のケーブルは、耐熱ケーブル1.2mm・25Pを電気管（36mm）で覆し埋設した。

2 事前調査のまとめ（平成元年）

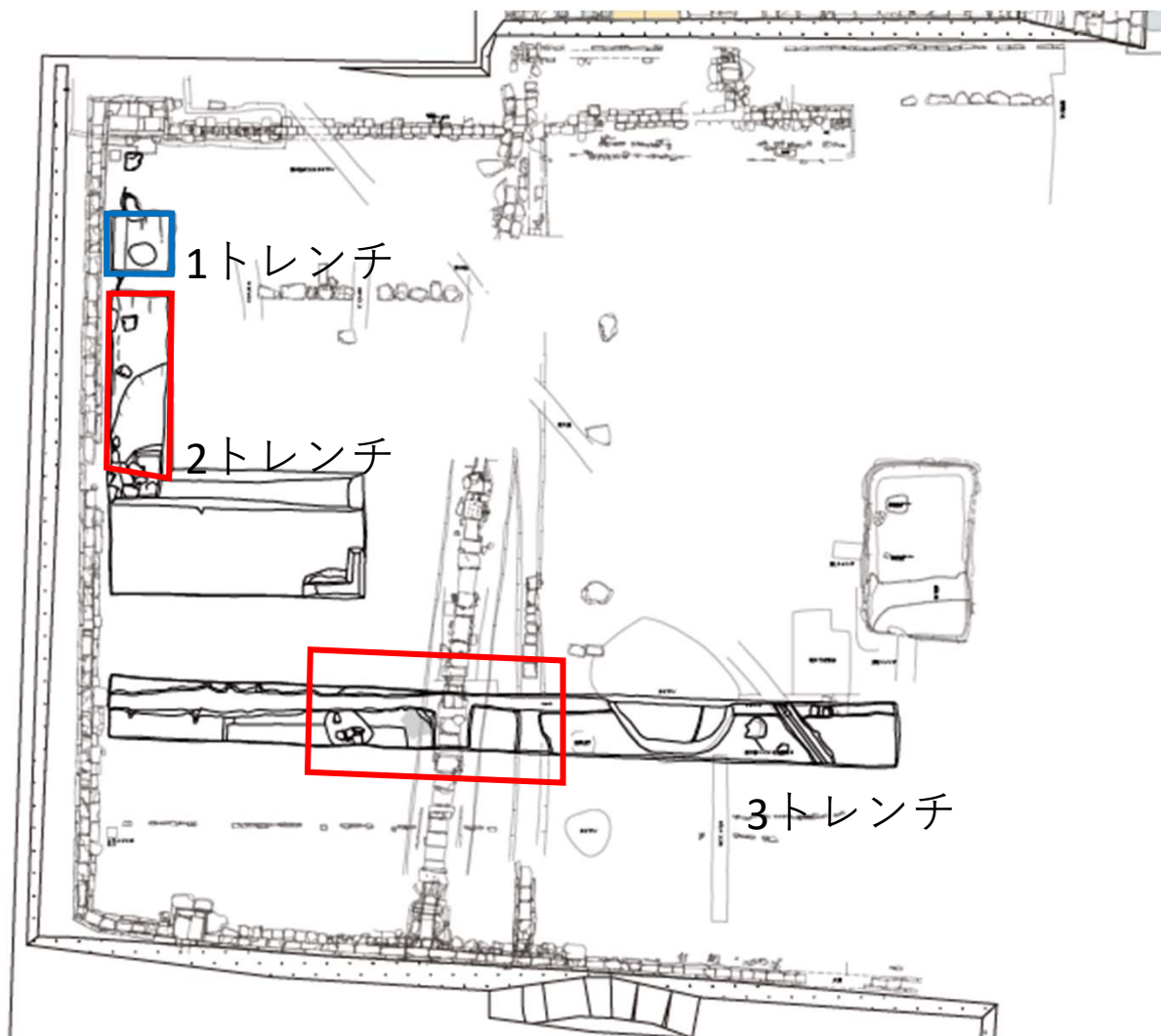


平左衛門丸平成元年調査平面図



平左衛門丸平成元年調査出土遺物

3 R3年調査の概要



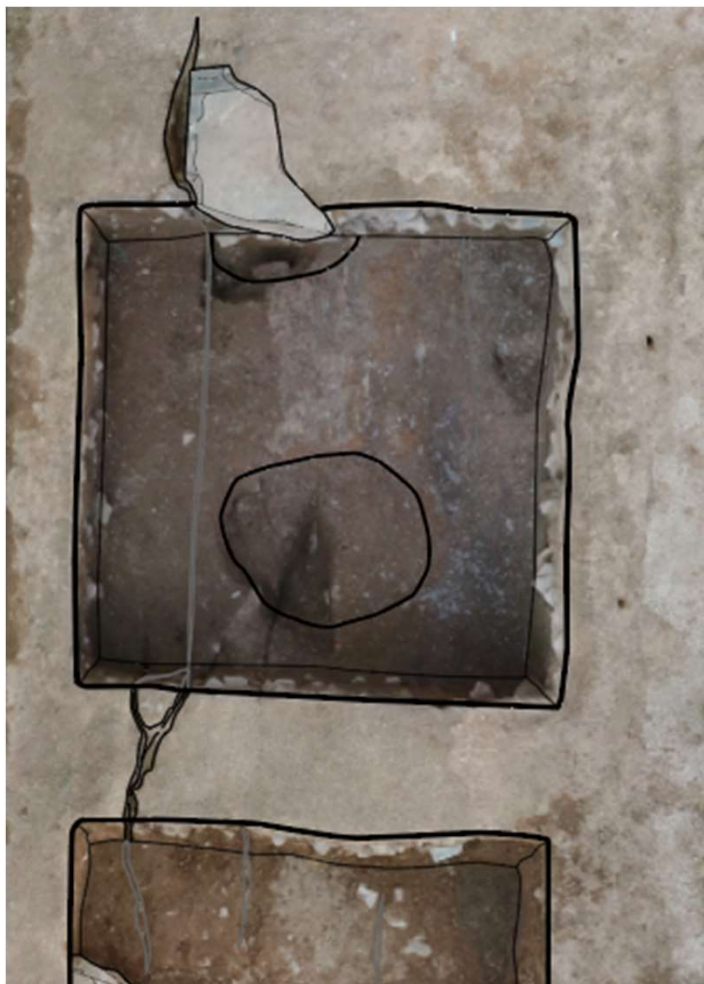
既往の調査成果からトレンチを3か所に設置し、委員会に諮りながら一部拡張を行った。

 現地指導により掘削深度の変更を行った部分

 現地指導により掘削範囲・深度の変更を行った部分

平左衛門丸令和3年調査平面図

3 R3年調査の概要（第1トレンチ）



第1トレンチ平面図



- ・調査前から地表面に地割れを確認
- ・地割れの深さ、石垣への影響を確かめるために約50cm平面的に掘削した。



- ・地割れがやや弧を描きながら西側石垣方向へ潜っていることを確認



8 第1トレンチ北側土層断面図

3 R3年調査の概要（第2トレンチ）



第2トレンチ集石部分

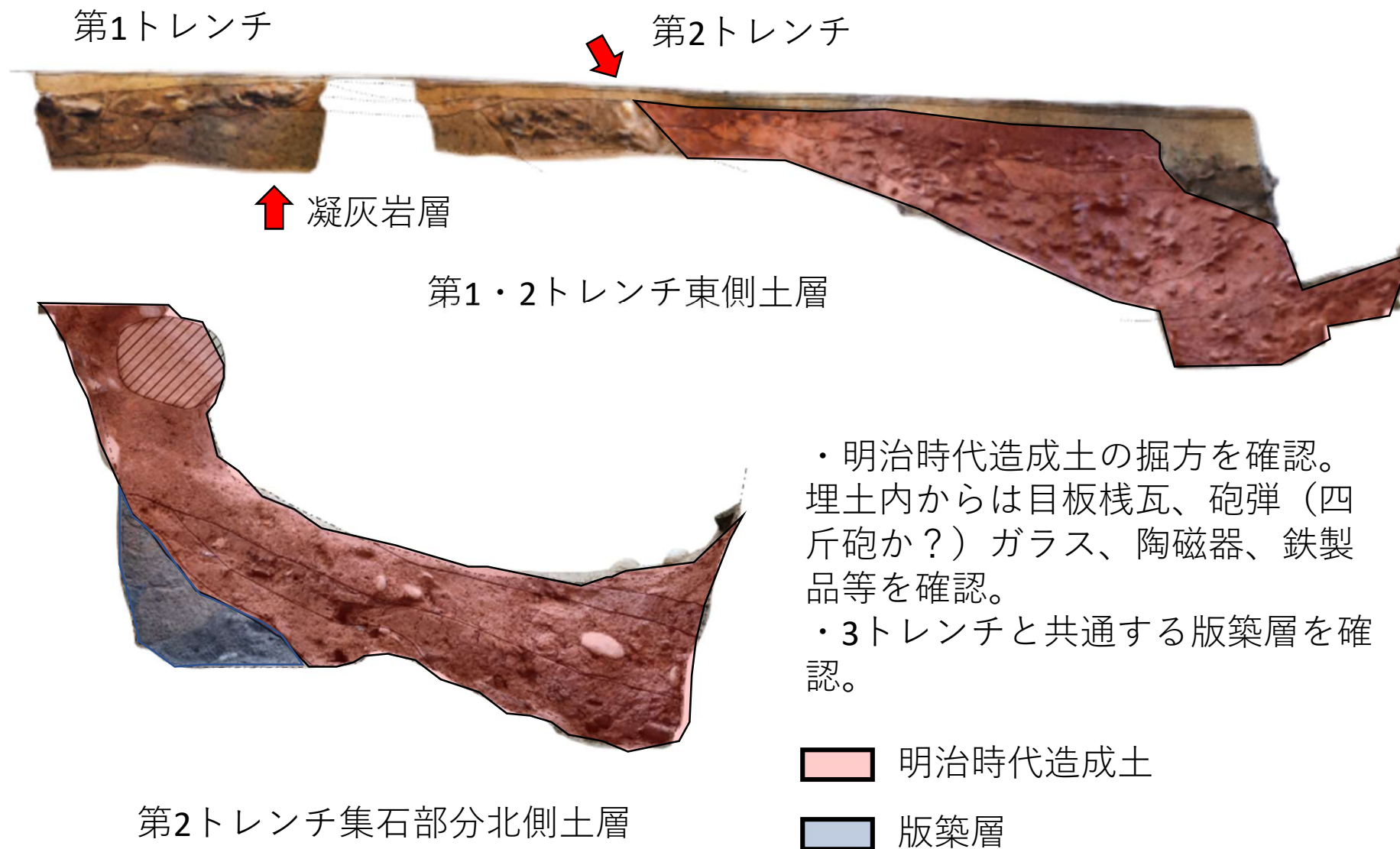
・第2トレンチ最深部で矢穴等の加工がみられる石垣石材の集石を確認した。平左衛門丸西側石垣の裏込めの可能性が指摘されたため、拡張しその全体像を確かめた。



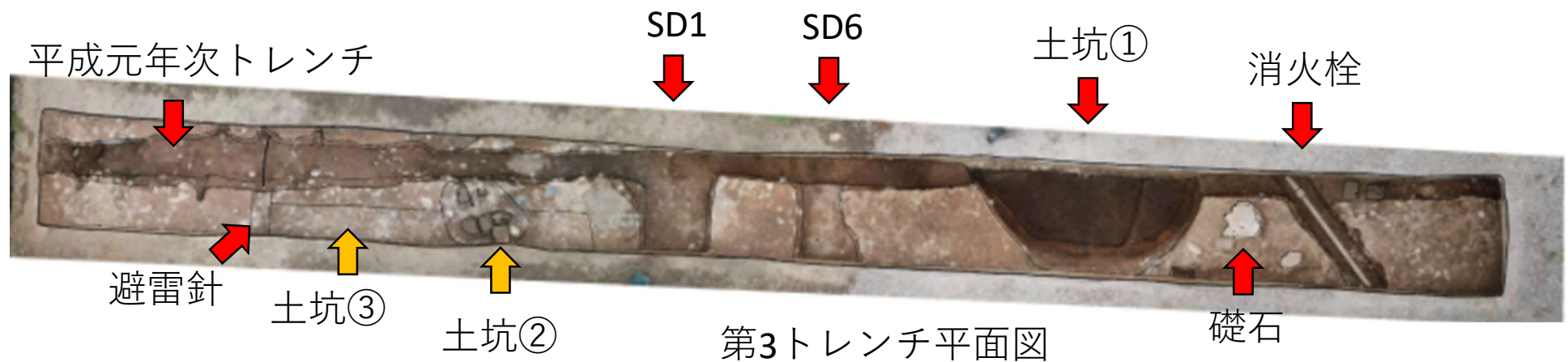
・石組の間の土層から板ガラスが出土すること、石組の中に加工された凝灰岩が含まれる等から明治時代埋土の中に入れられた石と判断

 凝灰岩

3 R3年調査の概要（第2トレンチ）



3 R3年調査の概要（第3トレンチ）



・土坑③からは昭和2年、昭和29年銘の補修瓦が出土していること、昭和32年設置と考えられる避雷針埋土に切られていることから昭和29年～2年の間に埋められたと考えられる。

昭和二十九年度補修

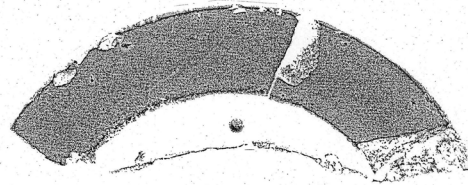


山土
上益城□□
白木勝眞

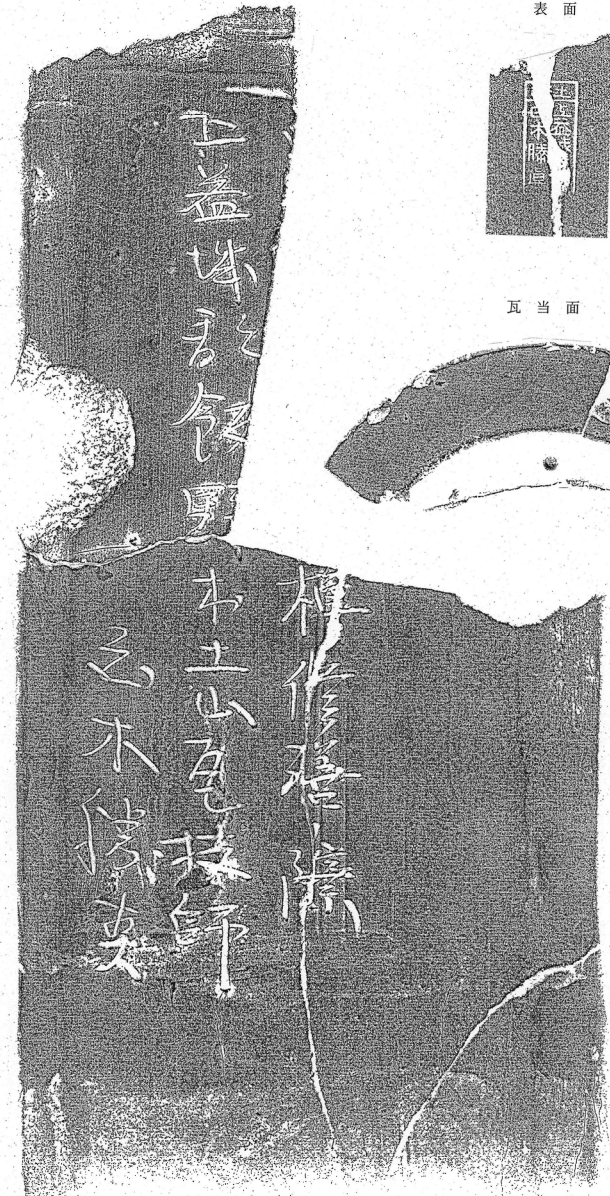
表面



瓦当面



□□□櫓修繕ノ際
上益城郡飯野本土山瓦技師
白木勝眞



3 R3年調査の概要（第3トレンチ拡張部）



第3トレンチ拡張部平面図



第3トレンチ拡張部全体写真

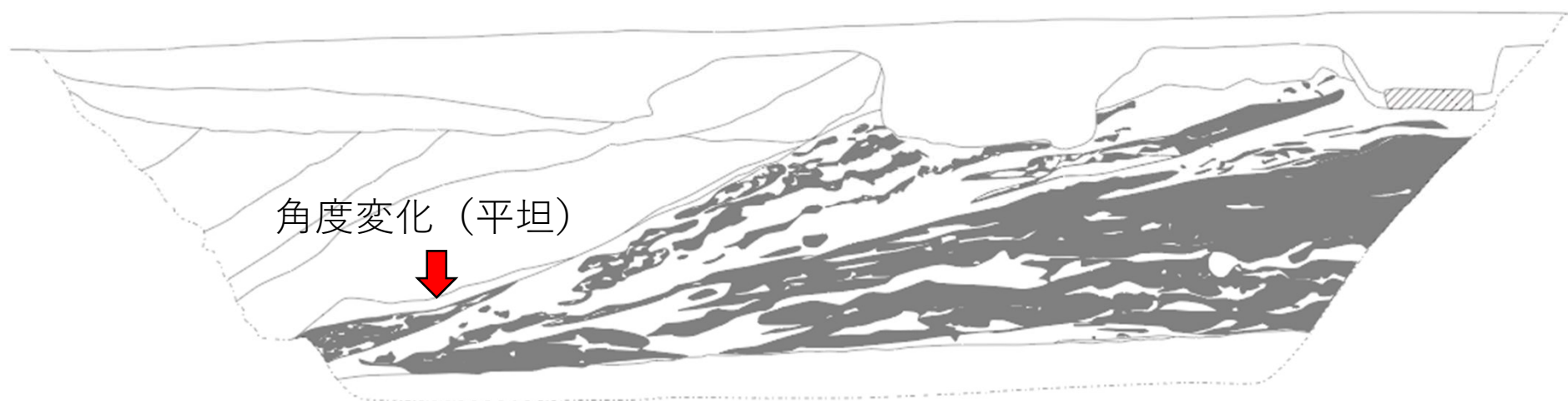


第3トレンチ拡張部版築部分



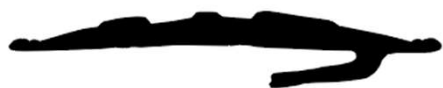
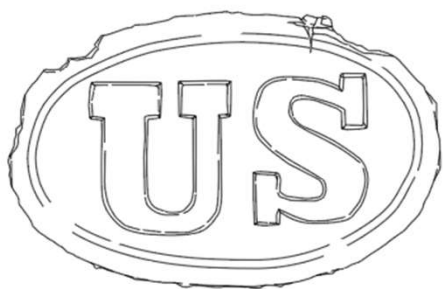
第3トレンチ拡張部土坑③部分

3 R3年調査の概要（第3トレンチ拡張部）

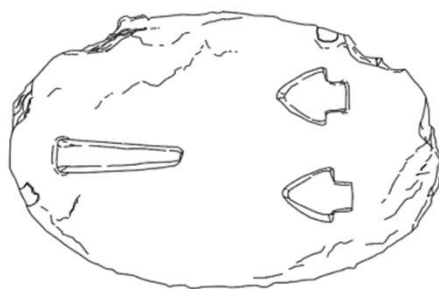


3 R3年調査の概要（第3トレンチ拡張部）

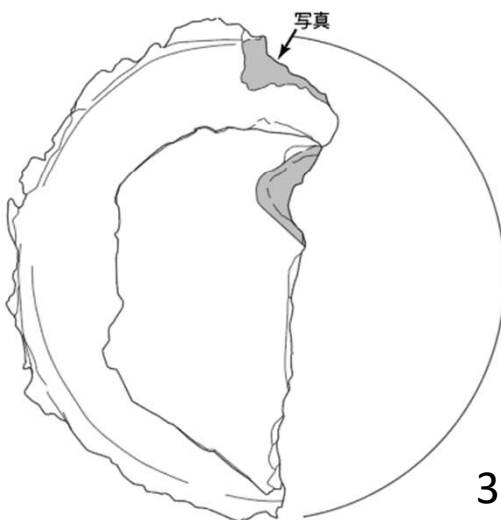
【炭化物層出土遺物】



1



2



3



15



4

3 R3年調査の概要（第3トレンチ拡張部）

- 1 米国の南北戦争（1861～1865）で北軍のベルトバックルとして使用された。
- 2 「HAYTER & HOWELL PACKER」「390/36」の銘があるメダル状部品。「The Post Office London Directory 1843」にはヘイター＆ハウエルの項に職業「Army packers」とありこれも南北戦争関係遺物と思われる。荷札か。
- 3 靴墨の缶で、「明治11年大日記省内各局5月水陸軍省第1局」には「各兵軍靴之義ハ是迄表皮□ヲ表ニ出別段靴墨ヲ塗染不致候」とあり、この通知をもって陸軍において靴墨が使われ始めることから明治11年以降の遺物であることがわかる。
- 4 「烏際圓」と呼ばれる薬容器の蓋で、本丸御殿跡の調査で複数出土しており、その際の分析で陸軍の一括購入品であったことが指摘されている。



炭化物層には西南戦争時に使用された陶磁器や金属部品のみならず、その後に使用され始める靴墨等も含まれていることから明治11年以降の造成と考えたい。

3 R3年調査の概要（第3トレンチ拡張部）

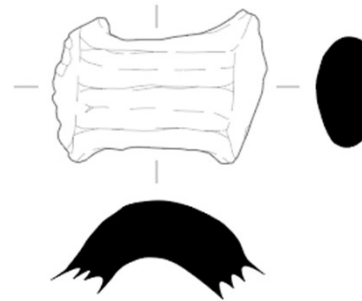
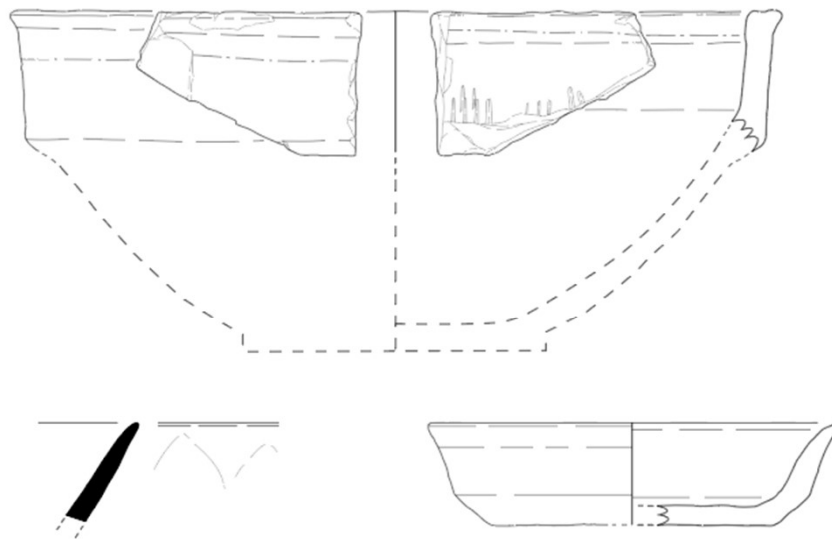
【版築層】



深鉢
古閑式
晩期

・版築層の黒色土部分からは縄文土器や黒曜石チップが出土している。城内では二様の石垣下で後期～晩期の縄文土器が見つかった。

【最下層】



・最下層からは東播系コネ鉢、白磁四耳壺、土師器、無鎬連弁青磁椀、明代青磁椀、土師器、中国産擂鉢等が摩耗を受けた状態で出土した。これらの遺物の上限は14世紀末～15世紀初頭である。

3 R3年調査の概要（第3トレンチ拡張部）

- ・ 埋没石垣については今回の調査では確認できなかった。
- ・ 地表に現れていた地割れについては軸をやや西に振りながら第1トレンチから第2トレンチに延び、内部はやや弧を描きながら西側石垣に向かって伸びている。曲輪東側については地割れ等は確認されなかった。
- ・ 第3トレンチ拡張部で明らかになった版築層については、傾斜は旧状を保っており、上層の凝灰岩層もほとんど同じ時期に形成されたと考えられる。また、第2・3トレンチ西端でも同様の版築層が確認される。これらの造成時期については大規模な盛土であること、上下の層との関係から加藤時代と考えたい。
- ・ 版築層の傾斜面は西側で平坦になること等からその先に構造物（埋没石垣か？）があり、それと関連した機能の可能性が考えられる。
- ・ 曲輪西側について大規模に明治時代に造成が行われている。
- ・ 昭和29年～32年前後に避雷針の設置や土坑の形成がみられる。

1tr東壁

2tr東壁

2tr南側東壁

2tr南壁

3tr北壁

